してくれた。 様女は初恋の経験をしたので、K君と 別れる心は起きなかった。その後彼女は 別れる心は起きなかった。その後彼女は がら家を継がないかの理由を尋ねてみた。 なは静かに過去を顧みつつ、小さい時 でいたので、その反動として家を継がな いぞと考えるようになった。 なの代と口癖のようにいわれ から家を継ぐのだと口癖のようにいわれ から家を継ぐのだと口癖のようにいわれ から家を継がのだと口癖のようにいわれ から家を継がのだと口癖のようにいわれ から家を継がのだと口癖のようにいわれ から家を継がのだと口癖のようにいわれ から家を継がる。

本されたのは大人として取扱ってきた証 本は彼女に両親がどのようにして育て を大学生活を送らせてくれた。四回生の時 について両親は何等の反対もなく、心よ に西欧諸国の独り旅も許してくれた。他 人の所で働くことも認めてくれた。他 ように長女としての我侭を全面的に許し なった。としての我のようにして育て なった。としての我のようにして育て がどのようにして育て

女は最後まで決心しかねて帰郷した。のを互に夜遅くまで話し合ひしたが、彼で、可能な道を求める以外に方法のないで、可能な道を求める以外に方法のないが代って経営した時、姉妹はどのようなが代って経営を求めえたことは幸福で

(つねかわ たけとし 社会学部教授

随筆

まぼろしか

下

陞

電灯の下で夕飯をかきこんだ日々のことでいまわり、そのあげく、わが家の暗いいあみ、幼い日々の光景を追いかける。の込み、幼い日々の光景を追いかける。形んこになって灯ともしごろまで野中を飛びまわり、そのあげく、わが家の暗いがまわり、そのあげく、わが家の暗いがある。

かわずのなくねも かねの音も田中の小路を たどる人も里わのほかげも 森の色も

ゴトン、ゴトンと揺れる車の響きの中

家は両親限りで分散しなければならない。

たので、何故末子が跡を継がねばならぬ

(洋裁見習)も二人の姉が自由に生活し(保母)も外に出てゆくだろう、三女

拠である。長女が跡を継がなければ次女

のかというであろう。こうなれば、この

な魅力をもっている。それはどこから来胸にあふれるものがある。この歌はそんぼ』の歌である。歌い終ったとき、ふとていつも最後にたどりつくのは『赤とん一つが終るとまた別の歌を……。そうし

の中に懐しさが残るばかり。の面影はもはやどこにもない。ただ夢幻ういない。ふるさとの山河は色あせ、昔ねえやの肩ごしに見たあの赤とんぼはもねえやの肩ごしに見たあの赤とんぼはもなくかけ小やけの あかとんぼ

山の畑の 桑の実を

小籠に摘んだは まぼろしか

だひとみも光を失った。みんな幻だったい。野山の輝きは消え、それを見た澄んい。野山の輝きは消え、それを見た澄ん甘ずっぱい味が口の中にひろがる。だが、桑の香はあおくただよい、かごの小粒の

らおいでをしても抱かれに来ない。ただ乳飲み子に両の手を差し出して、いく

のか。

ってゆく。えやはゆりかご。それさえ、はかなくなどもである。背中は子どものとりで。ね

背中を向けたとき来てくれる。それが子

十五で……とは何か不幸の予感がする。十五でねえやは「嫁にゆき」

るのか。

まったのだ。れてしまう。もはや、何もかも消えてし果たして頼みの糸も切れ、心の支えも崩

するばかりである。 は幻の世の哀愁に泣き、空無の感傷に涙 歌がここで終っていたなら、われわれ

ったものの影を追うひとみではなく、きある。それは懐旧の情にうるみ、消え去た。もう一度目をあげ、青空を仰ぐのでだが、作者 三木露風はそうしなかっ

てきたのである。

その観照の目は、日本の心の風光が育て

なざしである。

赤とんぼは、ほれ、今、そこにいるではきらきらと、夕日を浴びて羽を光らせ、とまっているよ 竿の先 タやけ小やけの 赤とんぼ

えてくれた。その眼光は日本文化の歴史の世の悲しみを深くつきぬけることを教がある。それは空似中の三諦によってこかがある。

つきつめた末に、それを逆転する。その輪はこの世の空しさ、無常のはかなさをの流れの底を貫いて来た。一心三観の法

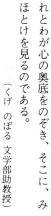
支点は仮観である。そのことをこの歌の

が、その膚に泌み込んでいたのである。仏教の哲理も学んだことはなかったろう作者は知っていた。直接、天台の教学も

を流れ、仏を観ずるものの目の中に光りではなく、諦観に根ざし、日本の心の底のに涙を流す。そのなみだは感傷のそれわれわれもまた、その目がとらえたも

る。そのとき、われわれは潤む目で、わ化された詩情は心の琴線にふれ、共鳴す歌いすすめて、ここに至ったとき、純

つづけてきたものである。





インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。